

学習者に身に付けさせる「ひと流れの動き」の検討（2）

山崎 朱音（静岡大学）

1. はじめに

即興表現に対応するねらいは、多様な題材やテーマから思いつくままにとらえた動きを誇張したり変化を付けたりして、「ひと流れの動き」にして表現することである（文部科学省，2008）。「ひと流れの動き」について、相場（2010）は「対極をもつ2～3の動きを良いひと流れの動きで表現」「良いひと流れの動きとは、動きにリズムや力の起伏をそなえたひと流れのことであり、動きで歌うようにはこぶこと」と述べる。また村田（2011）は『即興的な表現』では、動きの誇張や対極の動きを含む『メリハリのあるひと流れの動き』が表現的な動きの核となる」と示している。このことから、「対極の動き」「緩急強弱のメリハリ」が「ひと流れの動き」には欠かせない要素であると考えられる。

筆者はこれまで教材「新聞紙を使った表現」を事例に、「ひと流れの動き」とは、「多様な質感の新聞紙の動きを組み合わせることで連続性を持たせること」であることを明らかにした。この点について、他の教材では、また学校現場では「ひと流れの動き」がどのように理解されているのかを検討したいと考えた。

そこで本研究では、授業実践の記録において「即興的に踊る」・「ひと流れの動き」がどのような語として出現し、どのような関係性があるのかを検討することにより、改めて授業実践の中で「即興的に踊る（以下、即興表現とする）」ことと「ひと流れの動き」がどのようにとらえられているのかを検討することを目的とする。

2. 研究方法

（1）対象資料

対象資料は、（公社）日本女子体育連盟が刊行する「女子体育」のうち、2009年から2019年に発刊された小学校・中学校・高等学校・大学（大学は教員養成の授業のみ）の表現・ダンス実践研究が報

告された記事が含まれる49冊とした（ハンドブックを除く）。その中の実践研究報告118編から「表現・創作ダンス」を取り上げた記事93編を抽出、さらに「即興表現」・「ひと流れの動き」に関する記述があった記事55編を抽出し、分析の対象とした。

（2）分析方法

「即興」・「ひと流れの動き」について述べているパラグラフをすべてテキストデータに変換し、KH coder 3でテキストマイニング分析を行った。

3. 結果と考察

（1）前処理の結果

「即興表現」・「ひと流れの動き」について述べているパラグラフを対象にKH coder 3による前処理を実行した結果、総抽出語数（延べ数）13,453（5,620）語、異なり語数1,402（1,091）語であった。KH coder3では、助詞や助動詞は排除されるため、カッコ内の数字が実際の分析対象とした語数である。

（2）頻出語

出現回数を集計した結果、15語以上出現した抽出語は表1の通りである。

表1 出現回数15回以上の頻出語

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
動き	210	体	31
即興表現	195	指導	27
イメージ	99	グループ	26
表現	90	自分	26
子ども	61	授業	24
変化	57	ひとまとまり	22
ひと流れの動き	57	意識	20
流れ	50	リズム	19
活動	49	場面	18
工夫	49	特徴	18
学習	48	走る	17
身体	44	ダンス	16
テーマ	42	感じ	16
単元	34	題材	16
教師	34	止まる	16
イメージカルタ	33	課題	15
空間	31		

「即興表現」は195語、「ひと流れの動き」は57語出現した。「イメージカルタ」（33語）「走

る」（17語）「止まる」（16語）は題材・テーマであることから、「即興表現」「ひと流れの動き」を捉えやすい題材・テーマに、小学校では「イメージカルタ」、中学校では「走るー止まる」が挙げられることが推察される。

（3）語と語の結びつき

語と語の結びつきを検討するため、共起ネットワークを利用した（図1）。

「即興表現」と「ひと流れの動き」の語は、「動き」や「イメージ」「テーマ」「変化」などの語とネットワークを形成していた。このことから、「即興表現」と「ひと流れの動き」の関連としては、「テーマからイメージを捉えて即興的に動くこと、そしてそれに変化を加えてひと流れの動きにしていくこと」が、授業実践の中で理解されていると示唆される。「即興表現」は「学習」「活動」との結びつきがあることから、学習過程の中で捉えられていることがいえる。

また「ひと流れの動き」と関連している「変化」は、「空間」「リズム」また「体」とも関連していた。このことから、いわゆる学習指導要領で言われている「変化をつけたひと流れの動き」にするためには、空間・リズム・体の変化といった観点からの工夫を促していることが示唆される。

しかしながら、ここでは相場（2010）や村田（2011）が示した視点である「対極」「緩急強弱のメリハリ」が出現していない。このことから、

時間・空間の視点より力性に視点を置いた変化の付け方は捉えにくい点であることが推察される。

4. まとめ

「即興表現」と「ひと流れの動き」の語の結びつきを検討し、次の点が明らかになった。

「即興表現」と「ひと流れの動き」には強い結びつきがあり、「即興表現」はテーマからイメージを捉えて即興的に動くこと、「ひと流れの動き」は変化を加えてひと流れの動きにしていくことと理解されていることがわかった。さらに変化を加える視点としては、「空間」・「リズム」・「体」が促されており、「対極」や「緩急強弱のメリハリ」は授業実践の中で捉えにくい視点であることがわかった。

本研究では「対極」や「緩急強弱」の語については、語の出現が少なく今回キーワードとした「即興表現」「ひと流れの動き」との結びつきが少なかったことから、今後はこの2点との関連を視点を変えて検討していきたい。

<引用参考文献>

- 相場了（2010）今を生きる子どもたち，アイオーエム。
- 村田芳子（2011）表現運動・表現の最新指導法，小学館。
- 山崎朱音（2016）学習者に身に付けさせる「ひと流れの動き」の検討，舞踊教育学研究第19号，pp.42-45。

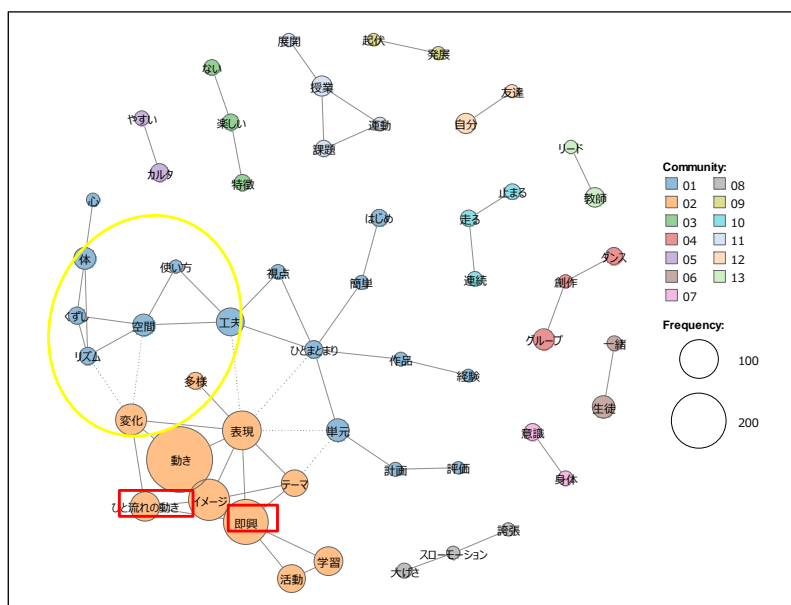


図1 パラグラフの共起ネットワーク図